



ファッション素材の
ちょっと・ウンチク

シルク

卑弥呼が魏王に献上した

シルクには、古代より数多くの伝説があります。その多くは、中国に起源する物語ですが、実は、日本には弥生時代からの歴史があることがわかってきました。

約1700年前の中国の史書『魏志倭人伝』には、邪馬台国の女王卑弥呼が絹織物を買いと記されています。また、佐賀県の弥生時代の吉野ヶ里遺跡からは、貝紫(かいむらさき)や茜(あかね)で染められた絹糸が発掘されており古来より日本では養蚕がおこなわれていたことが実証されました。



吉野ヶ里遺跡で発掘された絹(IPA教育用画像素材集)

山口県下関市の忌宮(いみのみや)神社には、秦の始皇帝の子孫である功満王が仲哀天皇(紀元200年頃)に、蚕の卵をこの地で献上し、日本に初めて養蚕を伝えたという石碑があります。

絵画の中の洗濯風景

洗濯する女性と子供



ユーベル・ロベール(Hubert Robert) 1761年

画家ロベールは、1789年のフランス革命以前のパリの侯爵家に仕える家柄に生まれました。若くして当時の外務大臣に随行してイタリアで10年以上を過ごすうちにローマやポンペイ遺跡などを巡りながら画家として古代ローマの芸術に影響されるようになりました。

この「洗濯する女性と子供」という作品にも、古代ローマの世界観があらわされています。しかし、女性の脇にいる少年が小便をしているというほほえましい情景に、その弧を描く小便と平行するように左の重厚な石造から放たれる噴水の水が描かれており、いかにもパリジャンとしてのユーモアもくわえられています。

ロベールはその後フランスに帰国しますが、フランス革命によって王家側の人間としてとらえられます。危うくギロチンを免れましたが、多くの作品は破壊されてしまったということです。

HomeDry News

ホームドライニュース No.119



●絵画の中の洗濯風景:洗濯する女性と子供

●ファッション素材のちょっと・ウンチク:シルク

●繊維と服飾の物語:

きもの小物をしまいましょ

●なるほど納得!衣生活の知恵

ナイロン生地は熱に弱い

繊維と服飾の物語



きもの小物をしましましょう

帯をしまうとき

帯をたんすにしまうとき 重ねるとどうしても折り目が付いてしまいます。そこでたたむときは 正面にくる柄の部分や、お太鼓の部分に折り目を付けないようにして 帯が傷まないようにすることが大切です

折り目を付けないようにするには 反物の芯かタオルを巻いて折れ目のところに挟んでたたむようにします。

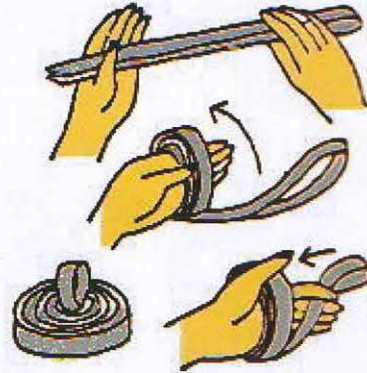


しまうとき忘れてならないのは 防虫剤と乾燥剤ですが、このとき直接帯に触れないよう和紙の上に置くようにします。特に金糸や銀糸を使ってあるところに直接接触すると、防虫剤の種類によっては変色することがあるからです。この方法ですと 折り目も付かず、変色などもせず、帯の寿命が延びます。

腰ひもを巻く

着付けの腰ひもはきちんと始末をしておかないと、いざ着るといふときにもつれてしまって使いにくくて困ります。簡単で取り出しやすい巻き方があります。

まず腰ひもを半分に折ります。そして折り山の方を右手で持ち、もう一方の端を左手で持って左の手のひらにくるくると巻きます。右の端10cmぐらいを巻き残して、これを左手の人差し指と中指で挟んで中へ引っ込めると、ちょうどひもの先が首を出したような形になります。これなら手早く巻けて、きちんと整理できるし、使うときもこの先を引っ張り出せば、着付けをしながら片手でほどけます。



帯締めの房は湯気に通す

帯締めの房がくしゃくしゃになって、情けない思いをすることがありませんか？

房の乱れを直すには、蒸気を利用するとうまくいきます。



やかんに湯を沸騰させ、帯締めの房を湯気に通すと、自然にのびて癖が直ります。房を整えるには毛糸の編棒などで房をほぐし、解かすと効果的です。くしでも良いのですが、新しいものでないと油分が付いて汚れるおそれがあります。湯気をくぐらせ、編棒でとかしつける。これを何度か繰り返してください。



スキーウェアやダウンジャケットの ナイロン生地は熱に弱い

スキー場で、ストーブでウェアを乾かそうとして生地が溶けてしまったことがあります。

ナイロン、ポリエステル、アクリルなどの合成繊維の融点（熱で溶ける温度）は、260℃以下ですから、うっかりストーブに接触しただけで溶けてしまうこととなります。



300℃の熱に一定時間接触していると、毛や絹などのタンパク質繊維は黒く炭化し、綿や麻などの植物繊維は、焦げたり燃えたりします。いずれにしてもほとんどの繊維製品は熱に弱いので、ストーブの熱ばかりではなくライターやタバコなどにも注意しましょう。